

想像力を働かせ、感じ取り味わう鑑賞教育の在り方
～感性を働かせるためのプログラムを通して～

福島県教育センター 指導主事 星 博人

1 研究の趣旨

県内の美術教師を対象に実施した「鑑賞教育に関する意識調査」では、鑑賞の授業の形式として、学習者が自分の見方で享受する活動よりも、教師主導の系統的な知識・理解に偏重している状況であることなどが分かった。感じ取ったことを基に、自分の思いや考えを大切にしながら、自分なりの意味を発見するなどの鑑賞の学習が十分に行われていない現状がある。平成20年1月の中央教育審議会の答申において、小学校、中学校及び高等学校の図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の改善の基本方針の一つに「感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する」と示された。そこで、この趣旨を具現し、学習者にとって受動的な鑑賞活動から、想像力を働かせ、感じ取り味わうといった能動的な鑑賞活動への転換を図る指導法を提案し、その効果を検証していきたいと考え、以下の二つについて研究を行うこととした。

- 想像力を働かせ、感じ取り味わうといった能動的な鑑賞活動の指導法として、対話による鑑賞の効果的な指導法について考察し、提案と検証を行う。
- 対話による鑑賞のねらいを達成させるため、視覚や触覚などの感覚を通して想像力を働かせる演習プログラムを考案し、その活用の在り方を提案する。

2 研究の概要

(1) 想像力を働かせ、感じ取り味わう鑑賞指導法について

① 対話による鑑賞の効果的な指導法

鑑賞する作品の知識や情報をどのように扱うべきかといった課題のため、学習者の多様な解釈を保障する「テート美術館の学校用プログラム」を参考にした。

② 感性を働かせるためのプログラム

鑑賞教材などを活用した演習を、感覚をとおして想像力を刺激し、造形要素を言語化するなど、感じ取り味わう鑑賞の視点に気付かせる目的で組み立てた。

(2) 鑑賞指導法提案の実際

対話による鑑賞を、教師を対象とした研修において提案する。そして、学習者が想像力を働かせ、感じ取り味わう鑑賞として実感することができたかを検証する。また、対話による鑑賞の前に行う感性を働かせるための演習が、鑑賞のねらいを十分に達成することに効果的に働くかを検証する。

① 講座1「創造性をはぐくむ図画工作・美術の鑑賞指導法講座」福島県立美術館

② 講座2「先生のための図画工作・美術の鑑賞指導法講座」郡山市立美術館

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 対話による鑑賞の体験を通して、鑑賞は、固定した価値観を教師主導で伝えるといった学習ではなく、学習者が想像力や思考力を働かせ、多様な解釈を生むことができる活動であること伝えることができた。

② 感性を働かせるための演習を体験した教師の全員が、その有効性について実感している。そのプログラムが、鑑賞の際の言語能力と、思考力を高め、作品の解釈をより発展させることに役立つことが分かった。何より楽しみながら鑑賞できることが、能動的な活動を促すこととなった。

(2) 今後の課題

学習者の想像力や思考力を伴った多様な解釈を保障するために、鑑賞しようとする作品についての知識や情報は、「どのようなものを」「どのくらいの量で」「どのタイミングで」与えるのがよいか十分に吟味していく必要があると思われた。